慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小山三郎君学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1993
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.66, No.3 (1993. 3) ,p.151- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19930328-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小山三郎君学位請求論文審査報告

文学は政治と無縁ではありえない。とくに、二〇世紀の現代中国文学が革命のなかで発展してきたことを考えれば、このことは一層明らかである。政治は自らの目的を達成するために文学を利用しようとする。文学は、自らの自立性を追求しつつ、政治の投げかける問題に対応しようとする。その意味で、政治と文学は、利用と自立性をめぐって、常に緊張関係を内包しているといえる。

小山君は、学部と博士課程を法学部政治学科で修め、修士課程を文学部中国文学科で過した。本論文は、このように自ら考える真実を誠実に追求して、政治と文学との境界領域を開拓した労作である。

小山君は、この研究を始める動機となった疑問をつぎのように吐露している。「それは中国共産党、とりわけ毛沢東が魯迅を高く評価したにもかかわらず、延安文芸講話以降魯迅の弟子たちは文芸整風運動に巻き込まれ粛清されていったという事実である」。魯迅の作品を一読すればわかるように、彼は中国共産党に同情を寄せつつ、中国国民党に対しては厳しい批判的態度をとり続けたにもかかわらず、そこには中共の要求する文芸政策とは異なった要素を見出すことができる。それにもかかわらず、今日にいたるまでの内外の現代中国文学研究の主流は、中共の文芸政策と魯迅との異質性に切り込むことなく、毛沢東の魯迅評価を受け入れてきた。本論文において小山君は、かかる潮流に対して果敢に挑戦を試みている。まさにその意味で、同君の提起した疑問を解きあかすことが現代中国の政治と文学の理解につながるのである。

小山君の論文の構成は左記の通りである。

第一章　序論—現代中国における政治と文学—
第二章　中国共産党の文芸政策と左翼作家—一九三〇年代の上海の左翼文壇—
第三章　毛沢東の「文芸講話」と左翼作家に関する考察
第四章　一九五五年の胡風事件
第五章　一九五七年の反右派闘争で批判された作家に関する考察
第六章　大躍進政策期の文芸理論と文芸政策
第七章　呉晗と「海瑞の免官」に関する考察
第八章　結論—作家の名誉回復から見た政治と文学

先に提起した問題に対する小山君の分析視角はきわめて明確である。第一章は主としてこの問題にあてられる。小山君は、現代中国文学のなかに二つの主要な潮流を設定する。一つは、「人民文学」と呼ばれ、毛沢東が要約・提唱し、その後、周揚ら

の「党文芸工作者」によってひき継がれた潮流である。それは、基本的には、文学を党の政策や路線の実行のための政治的手段として利用しようとする立場であった。そこでは、文学の自立性が否定され、その政治への奉仕が強調される。いま一つの潮流は、魯迅を中心とした「左翼作家」の立場である。彼らの拠りどころは、政治に対する作家の主体性とそれに不可分に結びついた創作の自由の主張にあった。

小山君はさらに、魯迅の小説観の分析を通して、これら二つの潮流を歴史的に位置づける。つまり、魯迅は、中国小説史の伝統のなかに、「一定の政治目的が文学の自律性を浸食」する「道徳的要素、宗教的要素それに諷諭教化を目的にする政治的要素」を見出していたのである。したがって、毛沢東や党文芸工作者の立場は、中国文学の伝統の上に位置づけられることになる。これに対し、作家の主体性と創作の自由を求める魯迅らの立場は、中国文学の伝統的要素を排し、五四文化運動以来の新しい文学潮流につらなるものと位置づけられる。中国における文学論争を見る限り、この二分法には説得力がある。

この論法によって、魯迅と毛沢東は切り離される。かかる二つの立場の対立は、単に文学上の論争にとどまることなく、文壇における主導権争いに発展した、というのが小山君の見解である。その意味で、政治と文学は、文学論争と政治権力闘争の二つの相互に関連した領域において、緊張をはらんでいた。この二分法のなかに、文学の政治に対する自律性を重視する小山君の立場を見出すことができる。第一章は、かかる観点から、本論文の扱う一九三〇年代から今日にいたるまでの文学潮流を概観したものである。

本論文でとりあげる二つの文学潮流の対立が基本的には一九三〇年代に形成された、というのが小山君の出発点である。第二章は、一九二八年の革命文学論争、一九三〇年の左翼作家連盟（左連）の結成、一九三六年の国防文学論争の三つの事件を通して、この対立の形成を論じる。

一九二八年に成仿吾、李初梨らの創造社、太陽社に拠る文学者が、革命文学を提唱した。彼らの主張は、「文学は無産階級に奉仕するものであり、『階級意識を喚起する一つの道具』」であるというものであった。それは、魯迅らの「ブルジョア文学」に向けられた批判でもあった。これに対して魯迅は、早くから『立派な文芸作品は、……他人に命令されたり、利害を顧みたりせず、あるがままに心の中から流れ出たものである』という立場をとっていた。魯迅は、政治と文学との関係を否定しないが、文学を政治の手段としてとらえるのではなく、人間の心からほとばしり出る文学に内在した価値、換言すれば文学の主体性を主張していたことになる。しかし、左翼作家内部での対立の激化を憂慮した李立三指導下の中共の仲介により、革命文学論争は終焉し、左翼作家が大同団結して、左連の結成にいたるのである。

文学者を大同団結させたはずの左連においても、魯迅らと党

文芸工作者との対立は続いた。つまり、党文芸工作者たちが左連を党の文芸政策を実行するための手段と考えたのに対し、魯迅らは文学そのものの自律性を認め、文学創作を通して革命へ主体的にかかわっていこうとする立場から抵抗していたのである。この対立は、さらに一九三六年に左連が解散された後にも、国防文学論争としてひき継がれた。つまり、中共の抗日民族統一戦線への転換に対応して、周揚らの党文芸工作者は、左連を解散し、国防文学のスローガンを唱え、文芸創作の内容をすべての生活現象ではなく、このような政策路線に沿ったものにすべきことを主張した。これに対して胡風は、魯迅とともに、民族革命戦争の大衆文学のスローガンを唱え、党の政策の干渉を排し、現実の生活のあらゆる側面を描くことを主張した。彼らは、中共の抗日民族統一戦線政策を支持しなかったわけではないが、創作に対する外部からの干渉を排した文学の内在的価値を重視していたことがわかる。第二章で小山君は、以上の視点に立って文学論争を詳細に分析している。

このような左翼文学者陣営内の対立に対して一定の結論を下し、中共の文芸政策を確立したのが、一九四二年に毛沢東が延安で行った文芸講話であるといわれている。この問題が第三章の主題である。本章で注目すべきは、毛沢東の文芸理論が延安で突如として現れたものでなく、一九二〇年代後半から三〇年代前半の江西ソヴィエト時期から醸成されてきたことを指摘し、とくにこの時期の分析を行っていることである。この点は、本論文の特徴の一つとして評価されてよい。

江西ソヴィエト時期の文芸政策の基本は、毛沢東によって一九二九年の古田会議で提示された。それは、農村革命根拠地におけるゲリラ闘争のなかから生まれてきたことを反映して、文芸を、農民を革命に動員するために党の政策を宣伝する手段としてとらえ、党の文芸工作者には農民大衆の中に入り、一体化することを求めていた。ここでは文芸が政治の手段と化しており、この文芸観は革命文学論争から国防文学論争に至る過程で示された党文芸工作者の立場と軌を一にするものであった。したがって、それは文学の主体性と創作の自由を主張する魯迅らの立場と相容れなかった。それにもかかわらず毛沢東は、魯迅のこのような立場を無視して、国防文学論争を「革命陣営内部の論争」としてとらえ、魯迅を「中国無産階級文学の旗手」に祭り上げた、というのが小山君の主張である。したがって、ここでは魯迅さえも党の文芸政策のまえに手段化されたということになる。

このような潮流の延長線上で毛沢東は一九四二年「文芸講話」を発表した。小山君は、講話の内容を分析するとともに、その意図について「毛沢東は作家の立場、態度、対象、方法、文学批評の基準に関しての彼の見解を述べ、左翼作家の文学論とそこから派生する彼らの抵抗の精神を直接的に封じ込めようとした」、と断定する。当時延安には全国からやってきた非共産党系の「左翼作家」が多数いた。彼らのある者は、創作の自

由に基づいて延安の現実を描き、共産党の支配そのものに批判的態度を示していた。毛沢東の文芸講話は同時に展開されつつあった整風運動の理論的支柱の一つとなり、そのなかで中共に批判的な「左翼作家」が排除されていった。小山君はその一例として王実味の問題を詳細に分析している。

以上のことからわかるように、この段階において、文学を政治に従属させる党の文芸政策は確立し、以後「人民文学」として現代中国文学の中で支配的地位を占めるにいたる。文学の主体性を主張した亡き魯迅は換骨奪胎され、偶像化されていった。それゆえに、魯迅と文学観を共有した文学者たちはその後党の文芸政策に抵触し、失脚していくことになるのである。第四章以下はこの問題を扱う。

第四章は一九五五年の胡風事件をとりあげる。魯迅の流れをくむ文芸評論家胡風は、同年文芸意見書を提出し、中共の文芸政策を批判した結果、「反党・反革命分子」として排除されるという事件が発生した。小山君は、この事件を単に突発的なものとしてではなく、これまでの文芸路線の対立のなかでとらえ、そこにより深い歴史的意味を読みとろうとしている。

胡風粛清のより直接的背景には、中華人民共和国成立以来の文壇における胡風グループと周揚らの党文芸工作者グループとの間の主導権争いがあった。しかし、この対立は、権力面においても、文芸理論の面においても、これまで述べてきた、一九三〇年代の左連時代における魯迅と党文芸工作者との対立までさかのぼることができる、というのが小山君の見解である。同君は、これまでの文学論争との関連でそれぞれの時期の胡風の立場を解明しているが、特に本章は一九四〇年代の国民党地区にいた胡風の文芸理論とそれに対する党文芸工作者の批判に新たな光をあてている点で注目される。この対立の焦点は、党指導下の文芸政策と文芸の自立性との根本的対立であった。ここにおいても、小山君の分析視角には一貫性があり、明快である。

このような理論的対立が解消されることなく、一九五五年に胡風は「政治的」に葬られた。しかし、一九八〇年以来中共は三度にわたり胡風の名誉回復を行った。その過程で作家の主体性と創作の自由を主張する胡風の文学観が「学術の範囲内」で肯定的に評価されるにいたったが、そのことを可能にしたのは文学そのものの内在的発展というよりも、今日の政治情況にあったことを小山君は指摘している。

胡風は政治的に抹殺されたものの、その文学論は文学の本質にかかわるものであっただけに、その後もくり返し現れてきた。一九五六～五七年の「百花斉放、百家争鳴」の自由化の時期に早くもそれが現れた。これは第四章の課題である。この自由化の流れのなかで胡風の文学理論を復活させた一人として、「現実主義」を唱えた秦兆陽がとりあげられる。それは、官僚主義的干渉を排し、「現実に厳格に忠実であり、現実を芸術的に真実に反映」するものであった。換言すれば、客観的現実と人間の芸術的感覚が結びつく限りにおいて、文学の主体性が保持さ

れたのである。この立場は、魯迅以来胡風にひき継がれた立場と軌を一にするものであった。しかし秦兆陽が「文芸講話以後解放区で党の文芸政策を担い、……胡風批判では積極的な役割を担」ってきた人物であったことを考慮すると、まさに彼が一人の文学理論家にもどったとき、文学の自立性を主張せざるをえなかったことは誠に皮肉な現象といわざるをえない。

一九五七年に入り政治の潮流が自由化から反右派闘争に転ずるにつれて、これまでの自由化の局面を担ってきた文芸理論家は批判にさらされ、最終的には「丁玲、陳企霞反党集団」の排除にいたる。この文芸面における反右派闘争を指導したのが周揚を中心とする党文芸工作者集団であった。闘争の一翼を担った邵荃麟は、文芸界の右派分子批判の基準として、「マルクス主義文芸思想」、芸術的基準に対する政治的基準の優先、文芸に対する党の指導の重要性などの要素をもち出した。これらの要素は、文芸作品の内在的批判よりも、文芸の政治への従属を目指したものであった。

第六章は、一九五八年の大躍進から一九六〇年代前半にいたる時期の文芸理論と文芸政策をとりあげている。一九五八年に毛沢東は、大躍進政策の一翼を担うものとして、「革命的現実主義と革命的浪漫主義が結合した創作方法」を提示した。そこでは、「民歌」、「大衆詩運動」が奨励された。それはまた、共産主義者を英雄的に描くことを可能にしたが、中国社会主義の現実をありのままに描くことを禁ずるものであった。その意味で、この方針は、文芸に対する政治の優先を示唆している。

しかし、大躍進政策の展開過程で矛盾が顕在化するなかで、毛の文芸政策に対する批判がもち上がってきた。最初に何其芳が「大衆詩運動」に異議を唱えたのである。続いて一九六〇年代に入ると、大躍進政策の修正につれて、再び自由化の流れがもどってきた。このような雰囲気のなかで、周揚らの党文芸工作者は、題材問題、典型論、歴史劇、文学史の評価などの問題を通して新たに文芸路線を提唱し始めた。それは、「大躍進政策によって破綻した中国社会の矛盾」をも描き出そうとするものであった。それは明らかに共産主義の英雄を描くことを強調した大躍進時期の毛沢東の文芸政策に抵触するものであった。周知のように、周揚は一貫して党の文芸政策を担ってきた文芸界の指導者であり、何其芳は胡風批判で重要な役割を果たしていた。この時期にいたり、それまで党の文芸政策を担ってきた人々は、当時の現実を描き切ることによって文学の主体性を主張し、それ故に毛沢東の文芸路線と衝突せざるをえなかったのである。ここに、周揚が文化大革命で失脚する伏線があった。

しかし、党文芸工作者の「背反」にもかかわらず、毛沢東の文芸路線を担う新しい指導者が台頭しつつあった。京劇改革を指導した江青、呉晗批判に立ち上がった姚文元らがそれである。この対立は文革に持ち込まれる。したがって、この構図は、歴史的にひき継がれてきた文学の主体性をめぐる二つの路線の対立が不変であることを示唆している、というのが小山君の見方

である。

第七章は、呉晗と彼の歴史劇「海瑞の免官」に内包された政治と学術の問題を扱う。周知のように、文化大革命は、毛沢東の意を受けた姚文元が一九六五年一一月に呉晗の「海瑞の免官」を批判したことに始った。この劇は、明代の清官海瑞が農民の側に立って皇帝の悪政を諫めた故事に題材をとったものである。姚文元は、呉晗が海瑞を彭徳懐に見立て、毛沢東の大躍進政策を批判した彭を擁護したとして批判したのである。

呉晗は、すでに一九五九～六一年の大躍進政策修正の時期に、海瑞にかんする文章を発表していた。大躍進政策の修正は毛沢東批判を暗に内包するものであったが、この時期に文芸面においても「作家個人の創造性が発揮できるように題材の選択の自由を保証」する雰囲気が存在していた。呉晗の文章はこのような状況のなかで書かれたのである。小山君は、呉晗の意図には、単に彭徳懐を擁護するだけでなく、農民の立場に立って生産力を増大させ、現在の困難を克服していこうとする意がこめられていたことを指摘している。さらに、その根底には、史実に忠実であることによって、「歴史学の分野における知識人の主体性」を確立しようとする欲求があった。

第八章の結論において、小山君は本論文で分析してきた「政治の流れに一貫して利用されてきた文学の流れ」を回顧し、さらに作家の名誉回復の問題に言及する。今日、過去に批判された作家の名誉回復が行われているが、胡風の例にみられるように、それらの多くは、文学の主体性にかんする内在的欲求よりも、現在の政治的必要性に動機づけられていると小山君は断定する。その限りにおいて、今後とも文学に対する政治の干渉と、文学の主体性を主張する文学者の抵抗は止むことがない、というのが小山君の展望である。

以上述べてきたことからわかるように、文学の主体性を基軸に据えた現代中国の政治と文学に対する小山君の視角と分析の対象には一貫性があり、明快である。これまでの日本において支配的であった魯迅研究は、毛沢東と魯迅を結びつける観点からなされてきた。竹内好や丸山昇氏の魯迅論もこの系列に属する。その意味で、小山君の主張は、毛沢東によって設定され、その後支配的となった魯迅評価を覆すものであった。しかも、その論理は、魯迅評価に限定されることなく、現代中国文学全体に妥当するものであった。その意味で、本書は一つの現代中国政治・文学論である。

ここに収録された論文は、『法学研究』、『アジア研究』、『芸文研究』などに発表されたものであるが、その主要部分は一九八七年度現代中国研究叢書（アジア政経学会）として刊行され、学界においても高い評価を得ている。

以上の評価を踏まえ、本論文の一層の発展を願って、つぎの二点について希望を述べておきたいと思う。第一は、ここで提示された二つの視角を具体的な作品分析に反映させることであ

る。このことは、小山君が論文作成にあたり個々の文学作品を無視していることを意味するものではない。しかし、代表的な作品のなかにその視角を投影することによって、その視角は微妙に、しかもより鮮明になってくるのである。第二は、第一点と関連している。政治に対する文学の主体性をめぐる立場の対立が最終的には政治的対立に帰着するとすれば、それを二つの路線の対立としてとらえることは可能である。しかし、この対立も個々の文学作品のなかでは必ずしも明確に現れない場合もある。また、そこには作家の心理的な揺れも現れるであろう。その対立は、微妙な相違を伴いつついろいろな形をとって現れるといえる。したがって、作品分析を通じて二つの路線対立の多様な形態をとらえ、それらが権力対立を通じて二極に収斂していく過程を明らかにしていくことが望まれるのである。

本論文は以上の未解決の問題点を残しつつも、現代中国の政治と文学という境界領域の研究に新しい分野を拓いたものとして、審査員一同博士（法学）（慶應義塾大学）を授与するに値するものと判断する。

平成四年九月二一日

主査　慶應義塾大学法学部教授　法学博士　山田　辰雄

副査　慶應義塾大学法学部教授　法学博士　小田　英郎

副査　慶應義塾長・名誉教授　法学博士　石川　忠雄